

上野幸夫

新湊市の社寺建築

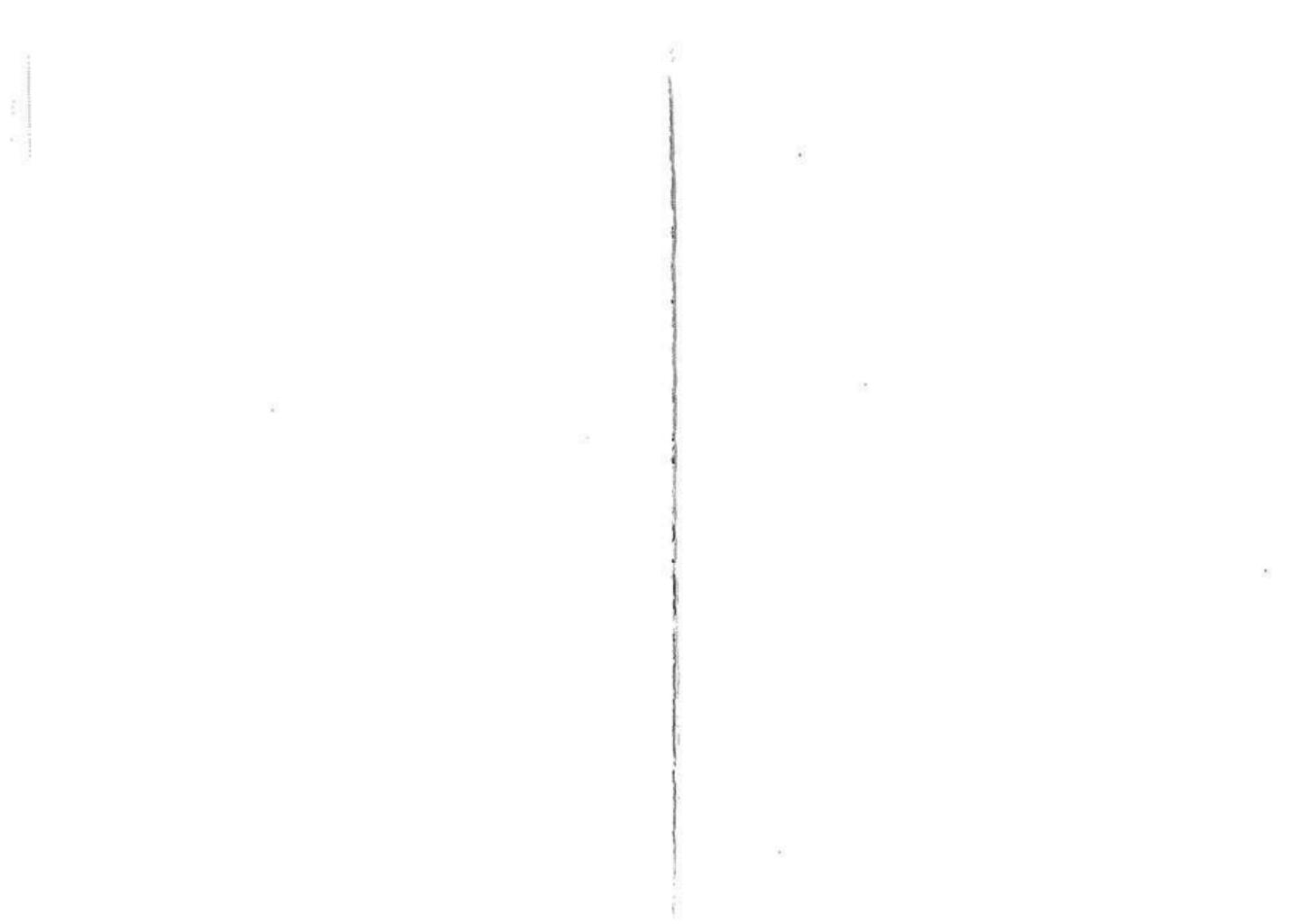
新湊市の社寺建築

上野幸夫

新湊市民文庫

26





上
野
幸
夫

新湊市の社寺建築

新湊市民文庫

26

【新潟市の社寺建築】

目 次

I 寺院建築 · · · · ·

一、門 · · · · ·

①自運寺旧山門 · · ·

②曼陀羅寺山門 · · ·

③常照寺鐘樓門 · · ·

④専念寺山門 · · ·

⑤淨蓮寺山門 · · ·

二、本 堂 · · · · ·

⑥法泉寺本堂 · · ·

23 13 11 9 7 5 3 3 1

⑦無量寺本堂 · · ·

⑧淨蓮寺本堂 · · ·

⑨光正寺本堂 · · ·

⑩自運寺本堂 · · ·

⑪大樂寺本堂 · · ·

三、庫 裡 · · · · ·

⑫光正寺庫裡 · · ·

⑬長榮寺庫裡 · · ·

⑭淨蓮寺庫裡 · · ·

⑮専念寺庫裡式台玄関 · · ·

41 39 39 37 35 33 31 29 25 25 23

四、鐘樓・・・・・

(17)光正寺鐘樓・・・・・

五、経藏・・・・・

(18)曼陀羅寺経藏・・・・・

六、祠文化・・・・・

(19)殿村の雲光寺前地蔵堂・・・・・

(20)今井の地蔵堂・・・・・

(21)海老江西町の地蔵堂・・・・・

II 神社建築・・・・・

一、入母屋造型拝殿・・・・・

(22)放生津八幡宮拝殿・・・・・

83 71 67

65

63

61

59

57

51

49

43

(23)諏訪三社拝殿・・・・・

(24)堀岡神明社拝殿・・・・・

二、神明造型拝殿・・・・・

(25)本江加茂社拝殿・・・・・

(26)八幡町神明社拝殿・・・・・

(27)宮袋日枝神社拝殿・・・・・

(28)六渡寺日枝神社山王鳥居・・・・・

(29)氣比住吉神社木造台輪鳥居・・・・・

(30)日吉社鳥居の額庇・・・・・

101 101 99 97 95 95 93 87 85 85

I 寺院建築

寺院建築は本堂を中心に、境内入口には門があり中へ入って鐘楼・經藏・庫裡などが配され、他に觀音堂や本堂と庫裡を接続する渡廊下などの建物がある。

伽藍配置は宗派によつても多少異なるが、一般的には主要道路に接して門を設け、境内は堀を巡らす場合と無い場合がある。本尊を安置する本堂はおおよそ伽藍の中央に位置し、本堂の正面に向かつて右手横（または左手）には住職の住まい兼接客となる庫裡を別棟で接続するか渡廊下で繋ぎ、格式を重んじた寺院では渡り廊下付近に式台玄関を設けている。庫裡と反対側の本堂横は墓地とする場合が多く、本堂の左手前（または右手）に鐘楼を配する場合が一般的である。經藏を持つ寺院では本堂と鐘楼間のやや入り込んだ墓地前に参道側を向けて建てる場合が多い。しかし、敷地や方位及び接する道路などの関係から若干ではあるがまつたく逆の例や違つた配置もみられる。



挿図1 一般的な伽藍配置



曼陀羅寺（建物が上図と左右逆に配置されている）

一、門

門は調査件数七十七件の内九件が一間薬医門で圧倒的に多く、鐘樓門が四件、四脚門が二件、棟門は法泉寺の一件のみであった。

【薬医門】

薬医門とは一本の本柱に冠木を乗せて背面に一本の控柱を立て、女木（肘木）と男木（腕木梁）を渡して屋根を受ける様式で、正面側は出桁状とするため、横から見ると屋根が前に張り出した姿となるのが特徴である。市内の薬医門の中では年代的に古いものは自運寺（現在は建て替えられ新しい）と曼陀羅寺がある。

①自運寺旧山門



自運寺旧山門



同上 妻飾り詳細

自運寺旧山門は簡素な門だが妻飾りの葵股や梅鉢懸魚に古式な意匠がみられ、破風板にはゆるやかな反りが付き、屋根の棟瓦下には当初のこけら葺きが残る。板扉の木目のつんだ良質の材が使用され鎧頭金具や八双金具も古式であった。

②曼陀羅寺山門

曼陀羅寺山門は年代的に古いだけでなく意匠的に優れており、冠木の正面に五七の桐紋を付けて両端には八双飾りを施している。紋や飾りに釘痕が残っていることから、当初は表面に漆箔か飾金具が付いていたものと考えられる。また、女木や男木の先端には木鼻状に伸びやかな渦や唐草を彫り、先端に木鼻付きの平三斗を乗せて軒桁や妻虹梁を受けている。妻飾りは虹梁・幕股にして虹梁下には独特な絵様・肘木を入れ、幕股には躍動感のある唐獅子彫刻を施している。天井は格天井になるが格間は更に田の字形に格子を組んでいる。軒は二軒疎垂木の化粧木舞になり、化粧垂木には反増しやこきを付け美しい軒の線をつくりだしている。意匠的な両開きの扉や背面の控柱は当時のものを踏襲したものか定かではないが、扉の上部入子板に繰り抜き彫刻梓を施したり、控柱の頂部を四角錐形にして八双飾り彫刻とした特異な意匠になる。



曼陀羅寺山門



同上 妻飾り詳細

【鐘樓門】

鐘樓門では、聞光寺や大寶寺が県内に一般的によく見られる楼門形式で、一階を棟唐戸の両開きにして出入口とし、二階四周には出桁形式で高欄付きの縁を設け、組物を入れて化粧軒とする。聞光寺は一階は角柱だが二階の柱を丸柱にして頭貫や台輪及び内法長押に鴨居を入れるが建具は無く開放としており、屋根は切妻造りをしている。大寶寺は一、二階とも角柱で頭貫を入れ柱間は菱格子とし、軒は技術的に高度な二軒の扇垂木になり、屋根は入母屋造りとする。禪樂寺は出桁や縁高欄及び柱間装置を廃して吹放しの鐘樓に近い姿になる。

③常照寺鐘樓門

常照寺は平面規模は小さいが、高さが一般的であるため、細く背の高い特異な姿になる。二階の柱間は開放とするが四周に木瓜型の額縁を入れたり、木鼻や破風尻を特異な意匠とし棟東を養東とするなど、個性的な楼門である。



大寶寺鐘樓門



常照寺鐘樓門

【四脚門】

四脚門には専念寺と淨蓮寺とがある。

四脚門とは二本の円柱本柱の前後に四本の角柱控柱を配した門で、中央棟通りの本柱間に一枚の門扉を入れ、屋根は切妻造りとする。

④ 専念寺山門

専念寺山門は大正二年に松井角平恒信を棟梁に建てられたもので、当時よく用いられた淨土真宗様とも言える形式の門で、虹梁や木鼻に渦と絵様を彫り込んだものである。門扉の上部は花狭間格子に寺紋彫刻を配し、両袖の小脇板には唐草彫刻を嵌め込み、両側面には花狭間格子の欄間を入れる。飛貫や虹梁形とした頭貫の隅には松井流の木鼻が付き、妻飾りは虹梁大瓶束にして東には笈形が付く。破風下に取り付く鰐魚の鱗などは緻密な唐草彫刻にして明治末に流行した亀岡式に近い新時代の意匠になる。



専念寺山門全景



同上 妻飾り詳細

⑤淨蓮寺山門

淨蓮寺山門は幕末期らしい特異な構造に彫刻装飾を多用した四脚門である。

中央の両開き柵唐戸の上部堅格子には寺紋彫刻が配され、冠木には牡丹を中心
に両脇に唐草の若葉彫刻が延びた彫刻が施され、扉上の欄間には迫力ある「波に
龍」、両脇の腰長押上には「岩場に立つ唐獅子」の彫刻欄間とし、内法貫を間に上
にも子獅子が配されている。彫刻の意匠や彫りが独特であるだけではなく、構造も
本柱を棟下まで延ばした禅宗様四脚門風の特異な構造になり、更に背面の控柱の
頂部が軒桁を受けない他に例を見ない形式になる。組物は本柱頂部が大斗拳鼻付
き平三斗で、両側面の斗下には虹梁木鼻として丸彫りの「唐獅子」とする。

屋根は切妻造りで曲率の強い破風板とし、水雲彫刻の懸魚を付ける。軒は二軒
疎垂木の化粧小舞とし、茅負両端に反り増しを付けた良質の仕上げである。この
門は構造・意匠ともに独創的で江戸時代末の特徴をよく示した秀作と言える。



淨蓮寺山門全景



同上 欄間・妻詳細

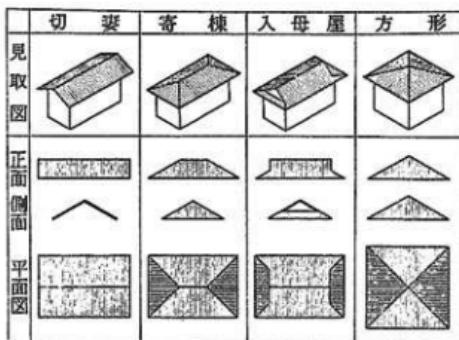
二、本堂

【屋根形式】

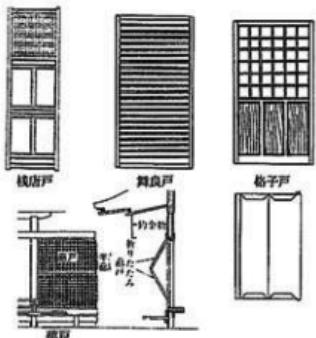
本堂の屋根形式は、総数七〇件中五五件が切妻造で、一三件が入母屋造、二件が陸屋根と、圧倒的に切妻造が多く、更に入母屋造のうち勝福寺・勝光寺・長榮寺・淨全寺は鉄筋コンクリート造で常照寺は木造だが共に近年建てられたものであるため、古い入母屋造は聞光寺・光正寺・妙蓮寺・蓮徳寺・淨蓮寺・専念寺・大寶寺・無量寺のわずか八件になる。

【平入・妻入・階高】

切妻造り本堂七〇件のうち平入が六六件で、妻入はわずか四件である。更に近年の建設になる浄土真宗の善行寺や後世の改造をうけている赤地蔵、および住宅を改造した宝篋寺を除けば、当初からの妻入は唯一入母屋造り妻入りの觀音堂形式を取る高野山真言宗の光明寺本堂だけである。



挿図2 屋根形式



挿図3 建具

階高は平屋建てが一般的で、二階建ての本堂は宗林寺・聖徳寺・宝英寺・西還寺、浄土宗の大佛寺と、すべて近年に建てられた建物ばかりである。

【向 拝】

向拝は本堂屋根から葺降した形式と唐破風屋根形式の二通りがある。葺降しの場合は雨仕舞いが良いが冬季間は雪が向拝前に積もるため仮設の合掌を組む必要がある。唐破風の場合はその逆で雨仕舞いが悪いが冬季間の出入りが容易になる。淨土真宗は五間堂の葺降しの向拝付きが一般的な形式だが、二階建の宝英寺・西還寺が構造上から下屋形式になり、常教寺だけが特異な平屋建ての下屋形式の向拝になる。日蓮宗や法華宗は少数例だが葺降しの向拝付きの形式になる。

淨土宗と曹洞宗は切妻造り平入りで中央に唐破風の向拝を付けるのが一般的だが、小規模の本堂の場合は向拝は下屋庇状としている。尚、土蔵造りの本堂になる大乗寺だけは淨土真宗などと同じ葺降し形式の向拝としている。



入母屋造平入 大寶寺本堂



入母屋造妻入 光明寺本堂

【柱間安置】

浄土真宗の場合は正面中央に大虹梁を入れて出入口とし、棟唐戸または帯戸を建込んで内側に障子戸を引込む。両脇間も同様の内法高的棟唐戸を建込み、正面と側面には高欄付きの縁を廻すのが一般的だが、堂内を明るくするために後世の改造で腰高格子戸やガラス戸及びサッシ戸に変更している場合が多く見られ、また、雪国であるため当初から縁を付けないものも多々見られる。

その他の宗派は正面中央間を棟唐戸引き違いの出入口とするのは同じだが、両脇間は腰下を下見板にして上は古くは三本溝で板戸（舞良戸）引違に障子一枚の引違いの窓とし、縁を設けない形式になる。しかし、浄土真宗と同様に後世の改修でガラスの格子戸等に入れ替えている場合が多い。

内法上は各宗派とも一般的に化粧貫を見せて白漆喰壁とするが、光正寺と光明寺だけが堅板壁としている。

【丸柱と角柱】

丸柱は入母屋造りの本格的な本堂形式のものがほとんどで、開光寺・光正寺・妙蓮寺・蓮徳寺・淨蓮寺・専念寺・大寶寺の七件あり、入母屋造りの角柱は年代的に古い無量寺だけである。尚、切妻造りでも覚正寺だけが唯一丸柱になる。

【柱頂部構造】

柱の内法上は、単に貫を一段ほど通して白壁としたものが多いが、円徳寺・光正寺・妙蓮寺・蓮徳寺・金像寺・雲光寺・淨蓮寺・大寶寺など頭貫を虹梁形にしたものと、開光寺・専念寺などその上に台輪を乗せたものがある。また、雲光寺は虹梁形の両端下にも絵様脚木を入れ、さらに意匠的にしている。なお、発願寺は内法上の貫を見せらず柱だけを表した特異な白壁になる。

【建登せ柱構造】

光正寺と蓮徳寺の側柱は小屋裏まで柱を延ばした建登せ柱構造としている。

【組物】

組物は単純なものは舟肘木とし、やや手の込んだものは絵様肘木や大斗絵様肘木としており、本格的なものは圓光寺・無量寺・金像寺などの拳鼻付きの平三斗や、光正寺・蓮徳寺・淨蓮寺・專念寺などの出組にして中備えに幕股を入れる形式とするが、妙蓮寺だけは中備えを柱上と同じ出組としている。尚、独創的な意匠の絵様肘木として、常教寺と善行寺の向拝のコウモリ型花肘木がみられる。

【軒】

一般的には垂木を一段に出して間隔をやや粗く配した一軒疎垂木が最も多いが、圓徳寺・光正寺・妙蓮寺・蓮徳寺・往還寺・淨蓮寺・專念寺・覺正寺・乘善寺など本格的に垂木を二段に出して間隔を密に配した二軒繁垂木としたものもある。なお、主屋は一軒でも向拝だけを二軒にする場合がある。

垂木の先端木口には防腐と化粧兼ねて白く胡粉塗りを施す場合が多い。



中備幕股 蓮徳寺本堂



中備出組 妙蓮寺本堂

【妻飾り】

妻飾りは一面白漆喰塗りの白壁とするのが一般的で、一部に小屋裏の換気口と採光を兼ねた四角または格狭間型の穴を意匠的に開けたものが見られる程度である。正規なものは一部の入母屋造本堂に虹梁大瓶束形式の妻飾りが見られるだけであるが、後世の修理でほとんどの建物が鉄板張りとしている場合が多い。

破風板の拌みには懸魚を付け、軒先の懷隠し板には渦や若葉の彫刻を彫る。

【屋根葺き材】

屋根は現在、棟瓦葺きがほとんどだが、切妻造りの勾配の緩い直線的な屋根を見ると、古くは石置き板葺き屋根であつたものが数多く見られる。また、後世の改造で屋根勾配を変えて棟を高くし、反りを付けたものも多々見受けられる。

唐破風の向拌は銅板葺きとしたものが多いが、こけら軒付が残つており曲線も多いことから、こけら葺きであったものと考えられる。



妻面白漆喰 覚正寺



妻面白虹梁大瓶束 専念寺

⑥法泉寺本堂

日蓮宗の法泉寺本堂は、七間堂の切妻造りで葺降ろしの向拝を付け、中央間出入口前には小縁と階段を付ける。両脇間は腰を下見板とした窓で、現在はガラス戸だが当初は板戸であつたものと思われる。柱の頂部に組物は無く簡素で、直線的な屋根から当初は石置き板葺き屋根であったものと思われる。向拝の渦や若葉の絵様は、線が細く彫りも浅く伸び伸びとしており古式である。

⑦無量寺本堂

浄土真宗の無量寺本堂は、九間堂の入母屋造りで葺降ろしの向拝を付け、中央間出入口は帶戸にして階段を付ける。両脇間は浄土真宗としては珍しい舞良戸を建て込んだ窓形式になる。屋根の反りは少なく筭甲も無い事からやはり当初は板葺きであったのだろうか。向拝周囲の絵様は線が細く伸び伸びとし、若葉に刺状の葉が付いて若干新しさを感じるが、彫刻はおおらかな彫りで古様をしめす。



法泉寺本堂詳細



無量寺本堂詳細

⑧淨蓮寺本堂

淨蓮寺本堂は棟札により安政三年（一八五六）に建てられた事が明らかで、幕末における典型的な淨土真宗本堂と言える。本堂は間口七間の入母屋造棟瓦葺きで、正面に一間の向拝を葺降ろし、正面と両側面の前寄りには高欄付きの縁を巡らす。向拝には意匠的な狛の木鼻彫刻や募殿を配し、本堂の組物は出三斗で虹梁形の頭貫に中備は募殿とする。正面の各柱間は棟唐戸で内法上は白漆喰壁になる。

⑨光正寺本堂

淨土真宗の光正寺本堂は市内最大規模の九間堂を誇り、富山県内においても大規模なものである。本堂は入母屋造り棟瓦葺きで正面に三間の向拝を葺降ろし、正面と両側面には高欄付きの縁を巡らす。正面中央間は引違の棟唐戸にして両脇間は諸折両開の棟唐戸とする。倒柱は小屋裏まで柱を延ばした建登せ柱構造とし、虹梁形頭貫で頂部を繋ぎ、出組は差肘木で、内法上は珍しい板壁としている。



淨蓮寺本堂



光正寺本堂

【曹洞宗本堂の特色】

淨土宗本堂と同じく切妻造り棟瓦葺きの平入りで、正面中央には唐破風の向拝を付けた形式が一般的で、柱間装置は向拝中央を棟唐戸引き違いの出入口とし、両脇間は本来、板戸引き違いの内側に障子一本入れた三本溝の窓だが、現在はガラス戸に替えられている場合が多く見られる。尚、窓下の腰は下見板張りとする。

向拝は西福寺だけが下屋形式の向拝で、中央の建具も舞良戸になる。向拝の屋

根は銅板葺が一般的だが西福寺と永照寺が棟瓦葺になる。これは、もともと主屋が板葺きで向拝がこけら葺であったなごりと、唐破風の瓦葺きが雪国には適さないためであろう。尚、唐破風向拝の天井はすべて格天井としている。

柱は角柱で、組物は年代的に新しい建ちの高い形式の自運寺が平三斗とする以外はすべて単純な舟肘木になり、軒も一軒の疎垂木が一般的だが、自運寺だけが二軒の半繁垂木としている。



長朔寺本堂



谷昌寺本堂

⑩自運寺本堂

曹洞宗の自運寺本堂は明治期らしい独創的な新しいスタイルの本堂である。七間堂だが中央五間を建ちの高い切妻造の身舎とし、両側面一間は下屋とするが正面側に隅木が入って棟通りで半分に切ったような入母屋造りになる。曹洞宗であるため正面中央には唐破風の向拝が付き、両脇間は腰を下見板にして障子引違の窓とし、両端に戸袋を備えた雨戸を建て込む。雨戸は採光を考えて中抜ガラスを入れ、内法上には菱格子のガラス欄間を設けるなど工夫を凝らしている。

向拝虹梁の渦や若葉の線の流れには勢いがあり、本堂側虹梁の若葉先端は珍しい雲になる。組物の肘木先端は木鼻型とし、棟木下の大瓶束の鱗は下が波で上を雲としており、唐破風板の眉も一般的には二段とするが三段としたり個性を感じられる。向拝の銅板葺きは後世の修理の手が入り、立派な蛇腹軒付けになるが軒付が薄く、屋根野地も変更したものと見られ筈甲が浅くなっているのは惜しい。



自運寺本堂



同上 向拝詳細

⑪大樂寺本堂

浄土宗の大樂寺本堂は市内では唯一の完全防火構造の土蔵造り本堂である。このような本堂は江戸時代より造られ、度々火災を繰り返していた石置板葺屋根の密集した町並みに所在する場合に用いられる事が多く、近辺では高岡や伏木および岩瀬の中心地にも見られ、防火構造面の類例では、後説する市内寺院の経蔵や神社の神輿藏・山車藏および光山寺丈六堂などが上げられる。

本堂は高い緑色布石積み基礎の上に立ち、腰と窓枠を緑色の洗出し仕上げにして上部は軒裏まで含めてすべて塗籠の白漆喰としている。正面に向拝廻り軒下の虹梁の渦や若葉、唐獅子彫刻の木鼻・複雑な曲線と足元に唐草彫刻を施した豪殿などは、左官職人が技術の粋を尽くした鎧彫刻と呼ばれるもので、特に唐獅子木鼻は遊び心の感じられる正面側を振り向いた姿になる。また、出入口や各窓の内側には土蔵と同様に裏白戸が建て込まれ、ハイカラな色ガラス戸に入る。



大樂寺本堂



同上 向拝詳細

三、庫裡

庫裡は主要なものだけを調査対象とし、八件調査した。本堂に対する位置は曼陀羅寺が唯一正面向かって左側で、その他はすべて右側になる。屋根は光正寺の入母屋造り以外はすべて切妻造りで、一般的には本堂と棟を平行にして接して建て平入りとする場合が多いが、敷地の広い寺院の場合は本堂との間に渡り廊下を配して、やや庫裡を本堂よりも手前に出して式台玄関を妻側に設けている。

建物の外観は腰を下見板張りにして格子窓や寺院らしく花頭窓などを配し、鴨居より上は垂直の柱と水平に入る貫を化粧に見せて白漆喰壁とするのが一般的である。屋根は現在桟瓦葺きになるが、勾配が緩く直線的である事から元は石置板葺き屋根であったのだろう。尚、式台玄関は入母屋造り軒唐破風付きと下屋形式の軒唐破風付き、唐破風造り、下屋形式の四種があり、幅三尺程の低い板敷と階段を付けて正面は四枚引違の舞良戸とするのが一般的である。



無量寺庫裡



浄蓮寺庫裡

⑫光正寺庫裡

光正寺庫裡は規模が大きく、屋根は起り屋根の入母屋造棟瓦葺で妻入りになり、正面右手に間口一間の切妻造起り屋根の通常玄関が突出し、左手には間口二間の入母屋造妻入りに軒唐破風を付けた大きく立派な式台玄関を突き出す。

庫裡の正面は角柱に腰長押と内法長押を廻し、腰下は堅板張りにして玄関以外の壁面は格子窓とし、内法上は小貫貫を化粧とした白漆喰壁で柱頂部は書院らしく舟肘木とする。正面の緩やかに起つた妻壁の三角面も白漆喰壁になる。

式台玄関は大虹梁を入れて両端に木鼻を付け、組物を乗せて中央の唐破風を受け、軒は二軒の疎垂木で妻飾りは木連格子に懸魚を付けるといった大寺院に相応しい本格的なもので、式台正面には板敷と階段を付け、舞良戸を建て込んで天井は格天井とする。この建物の特徴は、柔らかな起り屋根の庫裡とは対照的な厳格な反り屋根の式台玄関を付けた事にあり、その対比が実に調和している。



光正寺庫裡



同上 式台玄関

⑬長栄寺庫裡

長栄寺庫裡は他の寺院の庫裡形式とまったく違い、屋根勾配の緩い入母屋造り平入りの書院造り建物を表に面した事にあり、他の庫裡が妻を正面に向けて豪壮さと格式、威圧感さえ表すのに対し、上品で落ちついた雅びな感が生まれている。庫裡正面は柱を約一間間隔に立て、各柱間を四枚引違にして本格的な書院造りの建具である舞良戸と腰板のない水腰障子を建て込み、縁も付けず床下を吹き放しとしている。軒高も低く抑えられ、軒下の白壁に内法長押や小壁貫の横のラインが通った姿は簡素な意匠だが洗練されている。

右手前には唐破風の式台玄関を突き出しが、吟味した材を使用し、木割りも細く、唐破風や茨垂木の曲線も緩やかでラインが美しく書院造りとの調和が図られている。柱頂部の組物や大虹梁、棟木を受ける幕股なども比較的シンプルで落ち着きが感じられる。唐破風の鬼板だけがやや成が高く独創的な意匠になる。



長栄寺庫裡



同上 式台玄関

⑭淨蓮寺庫裡



淨蓮寺庫裡式台玄関詳細



専念寺庫裡式台玄関詳細

淨蓮寺庫裡は正面側の端を通常玄関とし、妻側中央に珍しい下屋形式の屋根に軒唐破風を付けた式台玄関を設けている。手前にはアクセントに花頭窓を配した一段屋根を下げた下屋を付け、奥には庫裡と本堂と連絡する渡り廊下が付く。式台玄関の幕股や懸魚・手挟や木鼻など細部の彫刻は、技術的に高度な透しや籠彫りになり、すべて「水」を題材としている。

専念寺庫裡は庫裡は新しいが式台玄関だけが古い。式台玄関は規模が大きく入母屋造りの妻側軒すべてを唐破風とした特異な屋根形式になり、一本で造りだした大きな茨垂木は圧巻である。また、両袖壁には「鯉の滝登り」と「獅子の子落し」の彫刻が嵌め込まれ、入口上部には花狛間欄間を入れ、中央の幕股には下向きの鳳凰彫刻が付く。他にも棟を受ける大瓶束や懸魚にも菱形彫刻が施される。

⑯ 曼陀羅寺庫裡

曼陀羅寺庫裡は、切妻造りならではの豪壮な妻面の棟側に行くに従つて高くな
るという効果を利用しており、下見板と白壁および庇だけの単純構成で垂直と水
平を強調し、洗練された姿にまとめあげている。

手前の便所廻りの南京下見は後世の改造だが、その他は当初の意匠になる。通
常玄関口は成の高い差鶴居を入れて両袖壁を付けて引分け戸とし、鶴居下の袖白
壁が一際映えて美しく、入口上には持送り彫刻の腕木を出して奥の窓まで含めた
一連の小庇を付ける。庇の屋根は緩やかに起り柔らかさを醸しだしている。此の
上は妻梁位置までを連続した下見板張りとするが、端は意図的に階段状に三角部
分を白壁として変化を付けている。二重梁下には舟肘木を入れて棟下の高い位置
には、室内の枠の内の梁組を照らす採光用の花頭窓が付けられている。

淨蓮寺や谷昌寺庫裡も現在は鉄板で覆われているが同様に美しい妻壁であろう。



曼陀羅寺庫裡



同上 詳細

四、鐘 樓

鐘楼は調査件数二四件の内一九件が切妻造で圧倒的に多く、入母屋造と方形造が共に二件あり、特殊な形式の樓造りが一件ある。尚、方形造の二件は共に鉄筋コンクリート造の比較的新しく建てられたものである。

【基 壇】

建物はすべて基壇上に建ち、自然石玉石積み・同割石積み・布石積み・亀甲積み・そして近年のコンクリートがある。亀甲積みでは長榮寺、淨蓮寺、大樂寺、瑞現寺があり、亀甲積み崩しは光正寺に見られる。

【軸 部】

柱は礎盤上に立つものが多く、丸柱が十件、角柱は一四件になる。すべて四方転びで腰貫と内法貫を通し、一般的に組物を組む場合は頭貫だけか頭貫と台輪を入れてある。



切妻造 曼陀羅寺鐘楼



入母屋造 長榮寺鐘楼

【組物】

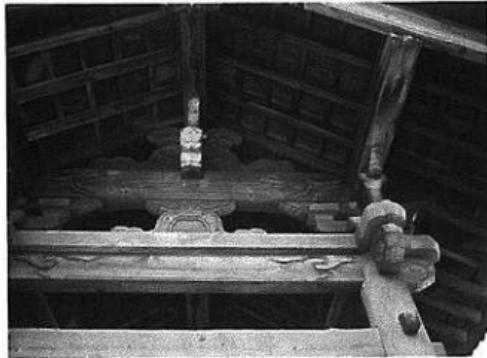
組物は無いものから絵様肘木・大斗肘木・大斗実肘木・出三斗とあり、本格的な出三斗に中備を葵股とした形式には光正寺、長榮寺、曼陀羅寺、大樂寺があり、角柱では光覺寺が唯一出三斗で中備えを平三斗としている。

一軒一

軒は一軒の疎垂木がほとんどで、二軒の繁垂木は妙蓮寺と長榮寺のみである。化粧屋根は簡易な化粧裏板を張つただけのものと、化粧小舞を配したものがあり、天井は無いものと格天井としたものの二種が見られる。特殊なものでは、光正寺が唯一手間のかかる扇垂木の化粧小舞になり、曼陀羅寺は幕末頃でありながら化粧垂木に反増しを付けた本格的なものになる。

【妻飾り】

妻飾りは簡易なものは東立ちだが、大寶寺だけは木連格子になり、本格的なも



曼陀羅寺鐘樓 軒詳細



大樂寺鐘樓 軒詳細

のでは光覚寺が虹梁大瓶束笈形付で、曼陀羅寺、大乗寺は虹梁蓋股で鐘を受ける。大梁の木鼻を中心突き出している。

【屋根】

屋根は切妻造りの場合、直線の破風板で簾甲の無い簡易なものと反った破風板で簾甲を付けたものの二種があり、光正寺と長榮寺は本格的な入母屋造になる。屋根葺き材は妙蓮寺と長榮寺が銅板葺で他はすべて桟瓦葺になる。尚、妙蓮寺はコンクリート造になるが、台輪から上の組物や屋根が木造になり、材質や意匠ともに優れている。

【特殊形の鐘楼】

特殊な樓閣造り形式になる自運寺は、回廊の屋根上に乗るような姿で、正面には切妻造り妻入りの地蔵堂を突き出し、二階柱間に花頭窓を付けるなど変化に飛んだ構造と意匠になる。



方形造 妙蓮寺鐘樓



樓閣造 自運寺鐘樓

⑯光正寺鐘樓

光正寺鐘樓は市内では数少ない本格的な入母屋造屋根の鐘楼で、軒を扇垂木とするなど意匠や技術面において優れた総構造の鐘楼である。

建物は現場で積み上げながら合端を取つて積み上げた亀甲積み崩しの基壇上に建ち、柱は丸柱で円形礎盤上に立つ。柱は四方転びになり腰貫と内法貫を通して柱頂部には頭貫と台輪を入れて隅部に木鼻を付け、頭貫の両端には渦と若葉の絵様を施す。組物は本格的な出三斗にして中備に幕股を入れ、軒は一軒で手間と技術を要する扇垂木の化粧小舞とし、天井は格天井としている。

屋根は本格的な入母屋造棲瓦葺きで、ゆつたりと反つた破風に二重の布裏甲を乗せ、懸魚を下げる。全体的な比例や木割りも良く安定感があり、軒の出は深く、建物の中央から全体的に反つた美しい真反りになる。



光正寺鐘樓



同上 軒廻り詳細

五、経蔵

経蔵はその名の如く仏教の經典を格納しておく建物で、鐘楼とともに伽藍の重要な建物であり、時を告げる鐘と法を伝える經典が僧侶の寺院生活を律する最も大切なものであることの象徴的意義が強く、古代伽藍では向かい合って建つ。

市内には経蔵が五件あり、宗派別では浄土真宗が三件で浄土宗が二件になる。

建物はほとんどが幕末から明治時代に造られたもので、石積布基礎の基壇上に建ち、火災にあっても大丈夫なように防火構造の土蔵造りとし、軸部は木造大壁造で、軒裏は覚正寺の木造置屋根形式を除いてすべて塗籠軒になる。

【平画】

平面は方一間の一室で、正面中央を出入口にして室内が覗けるよう格子や花狹間格子とした棧唐戸の引分け戸を建込み、他の三面は壁とするが、光正寺だけは側面に花頭窓を開けている。室内は書棚形式のものと中央に回転することでの



木造置屋根形式 覚正寺経蔵



八角輪蔵 曼陀羅寺経蔵内部

きる八角形の輪蔵を設けた二形式があり、それぞれ棚に教典が納められている。

【外観】

外部はどの建物も左官技術を駆使し、出入口廻りには鳥居枠となる蛇腹額縁を廻し、上部には意匠的な逆彫珞を付けたり花頭口形としたりするが、瑞現寺だけは出入口前に立派な塗籠になる唐破風の向拝を突き出して設けている。

基壇上の建物の基礎は壁止石となる地覆石を廻し、腰高に水切りを付けて腰下は平面か木瓜型の鼠漆喰とする場合が一般的だが、傷みやすい箇所であるため後世の修理でモルタル塗りに変更されている場合が多く見られる。腰上は白漆喰壁とし、軒蛇腹下の八巻部には単に見切台輪を入れたり四隅で垂れ下がった意匠的な羽衣型を付けたりする。光正寺経蔵は内法長押と頭長押状のものを入れて小壁を設け黒漆喰にして、正面側の両端には「蓮に極楽鳥」の漫絵を配している。また、覚正寺経蔵の一隅にも左官の遊び心として「鶴ともみじ」の漫絵が見られる。



唐破風向拝 瑞現寺経蔵



漫絵 光正寺経蔵

【軒】

軒は内湾曲した蛇腹形式や腕木を出した出桁形式が一般的だが、曼陀羅寺は大斗に放射状の腕木を乗せ木鼻付きの大斗絵様肘木で丸桁を受けるといった本格的な組物としており、垂木も平板形式や平行垂木が一般的だが、光正寺や曼陀羅寺は高度な技術と手間要する扇垂木になる。また、唯一の木造置屋根形式になる覚正寺経蔵は、天井の置き土上に土台桁を廻して木製の軒と屋根を乗せたもので、上部の屋根は燃えても下部は燃えないといった土蔵の置屋根と同じ考え方である。

【屋根】

屋根はすべて四角錐形で棟の無い宝形造の棟瓦葺で、頂部には露盤宝珠を乗せている。露盤には長栄寺が格狭間、曼陀羅寺は宝輪を配して隅飾り金具を付けた豪華なもので、宝珠は宝珠だけのものと火焰宝珠としたものの二種あり、宝珠の下には花弁を持つものも見られる。



光正寺経蔵



長栄寺経蔵

⑮曼陀羅寺經藏（一切經宝蔵）

曼陀羅寺經藏は明治二年三月の「一切經宝蔵新築寄付帳」や「設計図」から、この頃に建設された事が明らかである。建物は柱間二間角の方形平面の一室で、正面中央を出入口にして他の三面は壁とする。出入口には通常の菱格子の付いた棧唐戸と有事の際の防火用裏白戸の二枚の戸が引分けに建て込まれ、室内の中央には回転することができる八角形の輪藏が設けられ、教典が納められている。

外部は左官技術を駆使して出入口上部には瑠璃型の冠木を付け、上部八巻には四隅で垂れ下がった羽衣型が付く、軒は大斗に放射状の腕木を乗せ木鼻付きの大斗絵様肘木で丸桁を受けるといった本格的な組物としており、垂木も高度な技術と手間要する扇垂木になる。屋根は宝形造りの棧瓦葺きで、中央には象徴的な露盤宝珠が据えられ、露盤の各面には宝輪彫刻が付き、宝珠は火焰宝珠になる。

尚、室内の鏡天井には迫力のある「渦雲に一疋龍」が描かれている。



曼陀羅寺經藏



同上 軒廻り詳細

六、祠文化

全国的には路傍の石仏が一般的で、祠を建てたとしても簡易な屋根を設けた程度である。しかし、富山県の場合は信仰の厚さをものがあり、旧道沿いには数多くの石仏が祀られ、そのほとんどが立派な祠で覆われている。これらの多くは県西部に集中しており、その意匠や技術の高さは単なる雨露をしのぐ祠とはまつたく違い、堂宮大工や彫刻師、建具師や瓦葺師などの職人達が技術の矜を尽くしたものであり、富山県ならではの全国に誇れる優れた文化と言える。

そのような中において、新湊市内の祠は特にその数が多く、旧道沿いはもちろんのこと町内ごとの辻々に存在する。木造やコンクリート造があり、平面も四角だけでなく六角や八角もあり、様式も仏堂風だけでなく社殿風や多層形もあり、屋根も切妻造、宝形造、唐破風造、入母屋造と様々で、さらに細部には様々な題材の彫刻が配され、そして、これらが競い合うかのように建っている。



多種多様な祠

⑯殿村の雲光寺前の地蔵堂

殿村の雲光寺前の地蔵堂は、棟札により明治二十九年に針山新村の大工五十嵐善六を棟梁に建設した事が明らかで、均整の取れた軸部に繊細な各種彫刻と組物、深い軒に複雑な瓦屋根など、意匠・技術に於いて地蔵堂建築最高期の作と言える。建物は方一間角の木造單層の小仏堂で、平面は一室形式になり、正面は小脇板付きの棧唐戸両開きとし、両側面が連子窓で背面は板壁になる。柱は丸柱で円形礎盤上に立ち、腰長押と内法長押を廻して頂部に虹梁形頭貫と台輪を廻らし、組物は木鼻付きの禅宗様出組で、軒は二軒本繁垂木にして木口金具を付ける。細部には緻密な彫刻が施され、正面小脇板に「水渦に廻」、両側面の腰に「波」、正面の木鼻に「獅子」と「猿」、唐破風妻壁に「牡丹に獅子」が付く。屋根は入母屋造平入の正面に千鳥破風と軒唐破風を付けた複雑華麗な形式になる。瓦は全て祠用の小型瓦で、瓦当には卍紋が付き、鬼瓦は「水雲」や「龍」の彫刻鬼になる。



殿村雲光寺前の地蔵堂



同上 詳細

②今井の地蔵堂

建物は方一間角の木造单層の小仏堂で切込矧積みの榜腰型基礎上に建つ。平面は一尺入った位置に間仕切りを設けて吹き抜けの前室を設けた形式になり、正面は小脇板付きの棟唐戸両開きとし、両側面が連子窓で背面は板壁になる。柱は丸柱で円形礎盤上に立ち、腰長押と内法長押を廻して頂部に虹梁形頭貫と台輪を巡らし、組物は木鼻付きの禅宗様出組で中備は正面は出組だが両側面は幕股とする。軒は地蔵堂では大変珍しい技術と手間を要する二軒扇垂木で、この建物の最高の大工の腕の見せどころであり、特色になる。細部には緻密な彫刻が施され、正面小脇板に「水滴に蓮」、両側面の腰に「波に兎」、正面の木鼻に「獅子」と「象」、幕股に「竹藪に虎」、唐破風妻壁に「牡丹に獅子」が付く。

屋根は入母屋造平入りの正面に千鳥破風と軒唐破風を受けた複雑な屋根で、現在は銅板葺きになるが当初は祠用の小型の棟瓦葺きであったものと思われる。



今井の地蔵堂



同上 詳細

◎海老江西町の地蔵堂

海老江西町の地蔵堂は、背面壁に刻まれた銘より小杉町左官の名工「竹内源三」の作である事が判る。大正から昭和初期にかけて造られたコンクリート造の地蔵堂で、大胆で独創的な鎌彫刻を各所に配したこの時代を代表する建物と言える。

建物は亀甲積み風の袴腰型コンクリート基礎上に建ち、木造の地蔵堂と同様に平面は一間角の向拝柱付きで、正面を両開き戸にして両側面は連子窓とする。屋根は入母屋造平入の正面に千鳥破風と軒唐破風を受けた最も複雑な屋根になる。

この建物の一一番の特徴は何といつても鎌彫刻にある。向拝柱には「登り龍」と「下り龍」、上部の虹梁には「渦と若葉」を浮き出しに付け、木鼻には獅子彫刻、虹梁上には枠からはみ出た躍动感のある「一疋龍」、両側面の腰腰には「象」、そして、軒は二軒の垂木型を付け、屋根の鬼瓦は個性的な鬼面になる。これらの鎌彫刻は薄緑色になり、建物本体の御影石風疑石に一際映えて浮き立っている。



海老江西町の地蔵堂

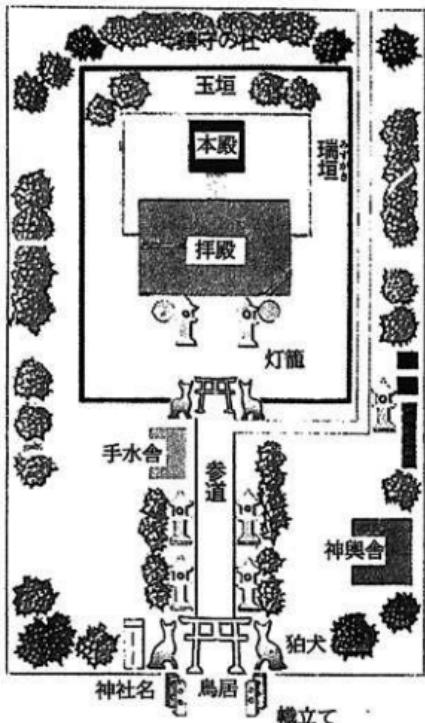


同上 詳細

II 神社建築

神社建築には拝殿・幣殿・本殿の主要な建物があり、境内には石造または木造の社標・鳥居・玉垣・手水鉢・灯籠・狛犬（撫で牛）などが配され、付属の建造物として手水屋・神輿蔵（山車蔵）及び社務所などが建てられる。

今回の調査はあくまでも外観から判断できる範囲の建物に限ったため、拝殿はすべての神社において調査できたものの本殿に関しては板壁や鉄板で雷廻いした建物がほとんどで、調査できたのはわずかである。付属の構築物や建造物に関しては可能な限り調査を行い、特に建物と関係の深い建設年代を明らかにした。神社境内は「鎮守の社」と呼ばれるように、一般的にはうつそうとした社叢があり、樹齢を経た大きな杉や櫻や松などが境内を取り囲んでおり、中でも一際大きな樹は御神木とされ「しめ縄」が張られている。また、低木として玉串として使用する常緑樹の「榦」が植えられている事が多い。



挿図4 一般的な神社の配置

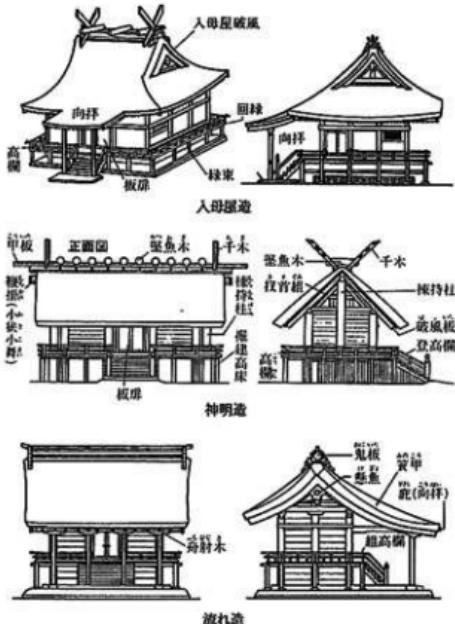
建築樣式

拝殿には大きく分けて入母屋造・神明造(神明造風)・切妻造・流れ造の四つの屋根形式があり、調査件数六九件の内、入母屋造が最も多く三二件で、神明造一四件、切妻造一二件、流れ造十件、その他一件となる。

規
模

【平
面】
規模は一間、三間、五間とあり、三間が一般的な規模だが、規模の大きなものは入母屋造で放生津八幡宮の五間社が寺院本堂に近い構造形式で県内最大規模を誇り、神明造では本江加茂社拝殿が最大規模を誇る。

拝殿平面の基本は前方二間が拝殿で後方一間を幣殿とするが、幣殿の面積が少ないため背面側へ半間から一間の葺降しの下屋を付ける場合が多く、さらに両側面も縁幅分の半間拡張したものも多い。拡張しない場合は釣殿で連結してしまう。



挿図5 神社のおもな屋根形式

一、入母屋造型拝殿

【平入と妻入】

入母屋造の总数三三件中二六件が平入で、六件が妻入と压倒的に平入が多く、更に近年建てられた立町天満宮、少彦名社、高木八幡社や、後世の改造で両脇半間ずつ増築し、屋根も入母屋に改造されている柳瀬神明社を除くと、妻入は大正初年に建てられた西宮神社と明治期と思われる魚取社だけである。

【向拝】

向拝の屋根は身舎から一連に葺下した屋根が一般的だが、七美野寺神明社や柳瀬神明社のように向拝を下屋状に一段落した形式が二件ある。また、近年建てられたものだが曼陀羅寺境内の天満宮のように軒唐破風を付けたものもある。

間口三間規模が一般的であるため向拝の柱間を一間とするが、最大規模の間口五間になる放生津八幡宮拝殿は向拝の柱間が三間になる。



平入 研波神明社拝殿



妻入 魚取社拝殿

【軸部】

柱は角柱が一般的で、年代的に新しい三日曾根神社と近年造られた松木日枝社の二件だけが丸柱になる。角柱の面は身舎が切面取りで向拝を几帳面とするのが一般的で、足固、内法、(小壁)、頭の各貫を通り、地長押と内法長押を付けて組立める。内法長押は正面中央間だけ一段上げる場合が見られ、内法上は藤ノ宮神明社と二の丸町稻荷神社が漆喰壁とする以外はすべて豎板壁になる。

【向拝】

向拝の軒下は水引虹梁を入れて両端に木鼻を付け、連三ツ斗に中備を募股するが、木鼻は禪宗様木鼻が唐獅子彫刻が一般的で他に象鼻や獣鼻が用いられる。水引虹梁上の募股は龍彫刻とするのが一般的だが、中には虹梁上を隙間無く龍の彫刻で埋め尽くした充填式も多々見られる。身舎と向拝は海老虹梁を入れたものと入れないものがあり、手挟は渦や若葉の簡素なものが一般的である。



立町日吉社向拝詳細



新明神八幡宮向拝詳細

【組物】

柱で桁を直接受けたものも若干あるが、一般的には舟肘木が多く、次に絵様肘木、そして、大斗舟肘木・平三ツ斗・出三ツ斗などが見られ、本格的なものになると、一手先に中備を養束とした殿村神社、諏訪木神社があり、さらに支輪付の一手先に中備を養股とし、隅木下に龍頭彫刻を入れた湊神社、片口神社、放生津八幡宮がある。尚、殿村神社の隅木下の龍彫刻は珍しい足付きの龍になる。

一 軒 一

軒には垂木が一段の一軒と二段に出した二軒が有り、垂木の密度によって疎垂木、繁垂木、本繁垂木と分けられる。繁垂木の場合は化粧裏板とするが疎垂木の場合は一般的に化粧木舞打ちとする。垂木は普通直線だが、作道道神社のように反りを付けたものもあり、木口には胡粉を塗るか飾金具が打ちつけられる。軒付けはこけら軒付積みが多いが、諏訪三社のように蛇腹軒付の例も見られる。



湊神社拝殿組物詳細



殿村神社拝殿組物詳細

【 縁 】

ほとんどの拝殿が正面と両側面の三面に高欄付きの切目縁を廻し、両側面の背後に脇障子を立て間仕切るが、若干ではあるが高欄を付けない場合もある。また、三日曾根神社は縁を設けないだけでなく土間形式とした特異な拝殿になる。

【 建 具 】

正面中央間は棟唐戸の諸折両開きとしたものが一般的で、採光と礼拝を考えて中間を格子または菱格子としたものが多い。残る正面両脇間と両側面の前二間は同一建具とする場合が多く、舞良戸または格子戸の引違いとするのが一般的だが、古いものには板戸も見られる。その他の建具では放生津八幡宮と諏訪三社が本格的な蔀戸になり、三日曾根神社は正面と両側面を、堀岡神明社は正面を板扉とする。側面の後端間は板壁になる。尚、最近はより明るくするために腰高ガラス入り格子戸に変更し、外部軒下にサッシの雪囲いを付ける場合がみられる。



中央町諏訪社拝殿



堀岡神明社拝殿建具詳細

【妻飾り】

妻飾りは本来、神社建築なので猪子投首とすべきだろうが、書院造風の木連格子や寺院建築の影響を受けた虹梁太瓶束も数多く見られる。懸魚は鰐付きの蕪懸魚に六葉を付けたものが一般的だが、妻が小さい場合は鰐の無いものもある。また、寺院建築と同様に後世に白の鉄板張りとしているものも見られる。

【屋根】

屋根は放生津八幡宮拝殿の本瓦葺を除いてほとんどが桟瓦葺で、他には近年建設の銅板葺一件、鉄板葺二件である。但し、桟瓦葺のうち当初はこけら葺であったものが多くある。また、特徴的な屋根として、利波神明社、湊神社、諏訪三社の背面を繩破風としたもの、西宮神社の本殿取り付き型による正面は入母屋造だが背面は切妻造になったもの、諏訪木神社の両側面の後端間に切妻造の小屋根が突き出したもの、他に、当初からだらうか大棟の両端に鰯瓦が付くものもある。



殿村神社拝殿妻飾り



殿村神社拝殿

【屋根瓦】

屋根はほとんどが棟瓦葺になるが、唯一放生津八幡宮拝殿だけが北陸では珍しい本格的な本瓦葺になり、近年の黒釉瓦では専念寺山門に見られるだけである。尚、近年建てられたものだが立町天満宮だけが銅板葺になる。瓦は後世の屋根葺き替えや修理が行われ定かではないが、古くは雪国ならでわの味わいのある赤瓦の特注の唐草瓦や役物瓦が使用されているが、近年はほとんど均一で平面的な黒釉瓦となっている。役瓦の使用で珍しいものには諏訪木神社の鬼面形の隅鬼や蟇瓦があり、軒唐草瓦では三つ巴紋に唐草が最多いが、放生津八幡宮拝殿は丸瓦が三つ巴紋の周間に連珠紋、平瓦は八幡宮の「八」の字を入れ、平も妻も本格的な降棟を付けている。同社靈應殿も鬼面形大棟鬼で蟇を菊唐草としている。

珍しい唐草瓦では、日吉神社の桜花紋、愛宕社と諏訪社の輪宝紋、八幡町天満宮の梅鉢紋、金比羅神社の「金」の字、西宮神社の紋などが上げられる。



放生津八幡宮拝殿屋根



同上 精應殿鬼瓦

◎放生津八幡宮拝殿



放生津八幡宮拝殿



同上 側面全景

放生津八幡宮拝殿は地元新湊の大工、名工高瀬輔太郎を棟梁に文久三年（一八六三）に建てられたもので、梁間・桁行共に五間の正面に三間の向拝を葺降ろし、四面に縁を巡らしており、仏堂を感じさせるような県内最大規模の拝殿である。平面は正面一間通りが吹き放しの広縁、中央二間を拝殿、奥二間を幣殿とし、外觀は神社建築らしく大面取りの角柱に内法長押を付けて蔀戸や板壁とする。向拝周囲の頭貫はすべて虹梁とし、組物は豪華な支輪付きの出組で中備に幕殿を入れる。向拝の唐獅子彫刻木鼻や幕殿の裏まで巻き付いた龍、手挾の瑞花瑞鳥、隅木下には巨大な龍頭と、隨所に見事な裝飾彫刻が施されている。

軒は出の深い二軒の本繁垂木で、屋根は北陸では珍しい本格的な入母屋造の本瓦葺になる。巨大な大棟や隅棟、平と妻の降り棟、各棟の反増しや箕甲も正規なもので、妻飾りは豪華な二重虹梁大瓶束に平三ツ斗と幕殿の架構としている。

②諏訪三社拝殿

諏訪三社拝殿は三間社入母屋造平入り向拝付きの典型的なもので、特に背面と両側面を拡張したことで背面に葺降しの下屋が付き、美しい繩破風が付く事が特徴と言える。また、建具を蔀戸としている事がこの建物を側面から見た場合に一層美しく見せている。柱の面も大きく取り、二軒の本繁垂木になる深い軒の先端には豪華な蛇腹軒付けを積み、宝輪の紋の付いた瓦が美しい軒反りを造る。

③堀岡神明社拝殿

堀岡神明社拝殿は正面の柱間装置に特色があり、中央間の長押を一本分上げて三間とも本格的な板扉を建て込み、板扉には三つ巴紋を付ける。また、向拝木鼻の「狛」や唐狹間の「雲に麒麟」、手挾の「雲に龍」、幕脇の「唐獅子」など、各所に配された彫刻は全体的に丸みを帯びた独特の彫刻法で見るべきものがある。この拝殿も諏訪三社と同様に繩破風付きだが、雪開いにより景観を損ねている。



諏訪三社拝殿



堀岡神明社向拝手挾詳細

二、神明造型拝殿

神明造は伊勢神宮に代表される神社本殿形式で、切妻造の平入り形式になり、両側面中央の外へ棟持柱が立ち、破風板の拝み部には歳小舞が付き、屋根には千木や鰹木が付けられている。この形式を取る一四件のうち本格的なものは本町神明社、八幡町神明社、港町白山社、草岡神社の四件があげられる。

【規模】

規模は正面が三間で側面を二間としたものが多いが、中規模の本町神明社、八幡町神明社、草岡神社は側面が三間で、最大規模の本江加茂社は四間になる。

【平面】

神明造の場合は入母屋造と違い正面に向拝は付けない。幣殿部は奥行二間では取れず、三間だと取れるが狭いため釣殿で連結する場合が多く見られる。建物の周囲には高欄付きの縁が廻される場合が多く、脇障子は付けず背面まで廻す。



港町白山社拝殿



草岡神社拝殿

【軸部】

柱は本格的なものは丸柱とするが、簡略や小規模のものは角柱になる。柱には切目長押と内法長押が付けられる。両妻に立つ棟持柱は愛宕社と槍ヶ崎神明社が無いだけで、他はすべて付き、頂部に行くにしたがつて細くなっている。

【建具】

柱間装置は、本格的な本町神明社、八幡町神明社、漆町白山社は正面中央を格子戸にして正面両脇間と両側面は蔀戸としているが、草岡神社だけは正面中央を棧唐戸にして他を板扉としている。他の建物は正面中央を棧唐戸や格子戸、または板扉にして他を舞良戸とする場合が多く見られる。

【斗組】

本格的なものは斗組が無く、柱で直接軒桁を受ける形式を取るが、小規模のものや特異で大規模な本江加茂社は舟肘木が入る。



港町白山社拝殿



本町神明社

【軒】

軒はすべて直線的な一軒にして化粧小舞とする場合が多く、一般に軒の出や妻側の出を深くしており、軒付けも茅葺きをイメージして棟から軒先側に下るに従つて厚くしており、屋根面もこだわって直線ではなく起り屋根としたものが多い。

【妻飾り】

両側面の妻（ケラバ）は極力大きく張り出しており、妻飾りは出雲大社のような縦横式と授首束と授首棹から成る豕授首式の二様式がある。

破風の拝み近くには、大棟を瓦棟とした場合でも神明造を象徴する小狭小舞（轔掛）を付ける場合が多く、左右四本ずつ細い木を突き出している。

【屋根】

屋根勾配は神明造が本来茅葺であるため、45度と一般の瓦屋根勾配よりも急な矩勾配になり、さらに茅葺のような柔らかい線にするため起り屋根としている。



草岡神社拝殿軒詳細



愛宕社拝殿妻飾り

㊱本江加茂社拝殿



本江加茂社拝殿



同上

本江加茂社拝殿は地元の名工長瀬震輔（高瀬祐太郎）を棟梁に明治二三年に建てられたもので、建物は間口三間、奥行四間で、両妻側の縁外には棟持柱が建ち、出が一間以上はある深い軒とケラバを作りだしている。柱は円柱で頂部に舟肘木を入れて桁を受け、長押と内法長押を廻して内法上には小壁貫を一本通して堅板壁とする。正面の各間は中間を菱格子とした諸折両開きの棧唐戸を建て込み、側面は手前二間が近年取替えられた引違の格子戸で、奥二間は白漆喰壁としている。妻壁は縦横式形式で、東立て舟肘木の二重梁とし、軒桁から棟木へ向けて投首桿を入れ、妻壁は現在白塗りの鉄板張りになるが当初は白漆喰なのだろうか。破風板には一定間隔に木瓜型のような縁抜き彫刻が施されている。屋根は当初から桟瓦葺であったのかは定かではないが、神明造らしくこけら葺で千木や勝男木が乗っていたのかもしれない。年代的にも先駆けで、規模も大きく優れたものである。

◎八幡町神明社拝殿

八幡町神明社拝殿は三間社神明造の比較的古い例で、奥行は三間とし蔀戸を建てる。両妻に棟持柱を立て、妻飾りは継横式で、破風の拝み部に小狭小舞を付け、屋根面も起らせており、棟の泥障板や甲板も正規な形で付き、両端の出も大きくバランスも良い。両端に付く千木は破風延長形式になり、風抜き穴も付き、蟇木は六本と市内では最も多い。本格的な三間社神明造の好例と言える。

◎宮袋日枝神社拝殿

宮袋日枝神社拝殿は奥行が二間の神明造形式で、正面中央間を諸折両開の板扉とし、両端間と両側面前間は舞良戸とする。棟持柱や棟飾りなど本格的な神明造形式で、軒の出やケラバの出も深い。縁束を強化するために足固貫が入るが垂直性が損なわれてしまう嫌いがある。内法から上が長く全体的に立ちが高い事や、屋根勾配が比較的急である事は時代や棟梁の違いによるものと言える。



八幡町神明社拝殿



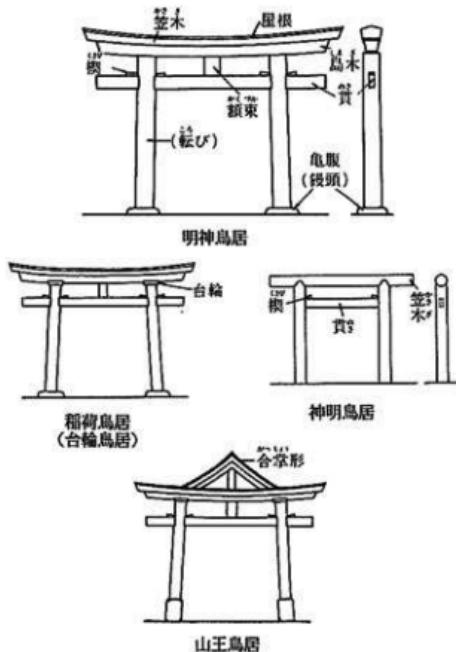
宮袋日枝神社拝殿

三、鳥居

鳥居は調査件数四〇件の内、江戸期に遡るものは六渡寺日枝神社の天保十年を最古に、港町白山社の天保一四年、堀岡神明社の弘化三年、朴木日吉社の嘉永五年の四件で、他は明治一件、大正八件、昭和の戦前一二件、戦後一五件である。

石製鳥居は神明鳥居と明神鳥居が一般的だが、市内最古の鳥居である六渡寺日枝神社は明神鳥居の上に破風形の合掌を乗せた特異な山王鳥居形式になり、年代的・意匠的・技術的にみて優秀である。但し貫の柱内の材は後補材とみられる。

木製鳥居としては氣比住吉社・立町日吉社・檜ヶ崎神明社・浦田神明社・草岡神社・愛宕社などがあり、すべて台輪鳥居形式で、特に氣比住吉社の鳥居は柱や台輪及び笠木の屋根を銅板で包み、貫や鳥木の端部には八双飾り金具を付けており立派である。また、放生津人幡宮・立町日吉社・本江加茂社などの鳥居額は、彫刻を施した持送に組物を置いて豪華な唐破風屋根を乗せた見事なものである。



挿図6 鳥居の形式

◎六渡寺日枝神社山王鳥居

日枝神社の石鳥居は大変珍しい形をした山王鳥居という形式のもので、柱に刻まれた天保十年（一八三九）の銘により建立年代も明らかである。市内にある鳥居としては特異な形式をとるだけでなく最古でもあり、県内は元より全国的にみても、山王鳥居としては江戸時代後期の年代が明らかかな数少ない鳥居といえる。

山王鳥居は一般的な明神鳥居の上に破風状の合掌を乗せた特異な形式で、滋賀県の日吉大社を總本社とする山王權現関係の神社に用いられ、合掌鳥居や總合鳥居とも言われる。上部構造は棟束と合掌形の破風、棟木に相当する鳥頭から成る。日枝神社山王鳥居は、比較的木割りも太く堂々としており、鳥木と笠木の反りも増しも時代の特徴をよく表しており、特に難しい構造を巧みに組み上げている。破風に入る二本の筋は眉や雨覆いの裏甲を表しており、鳥頭はひら方向について反り増しがある。年代的・意匠的・技術的にみても優れた貴重な遺構である。



六渡寺日枝神社山王鳥居



「天保十年己亥九月吉旦」

同上 刻銘

◎ 氣比住吉神社木造台輪鳥居

氣比住吉神社の鳥居は木造の台輪鳥居形式で、柱や台輪及び笠木の屋根を銅板で包み、貫や鳥木の端部には八双飾り金具を付けた大変立派な鳥居である。ほぼ木割書の比例に基づいて造られたものだが鳥木と笠木の反り増しも極端に大きくなくゆったりとして均整のとれた鳥居と言える。

台輪鳥居は明神鳥居の変形で柱頂部に台輪を入れたもので、京都府の伏見稻荷大社に用いられている事から稻荷鳥居とも言う。

◎ 日吉社鳥居の額庇

鳥居の中央には額束が立ち、その前に社名を記した額が掲げられる。この額の保護のため造られたのがこの豪華な庇である。雲の彫刻を施した持送上に組物を置き、入母屋造妻入に軒唐風を付けて豪華な銅板葺屋根とした見事なものである。同様の見事な額庇は放生津八幡宮や本江加茂社の鳥居にも見られる。



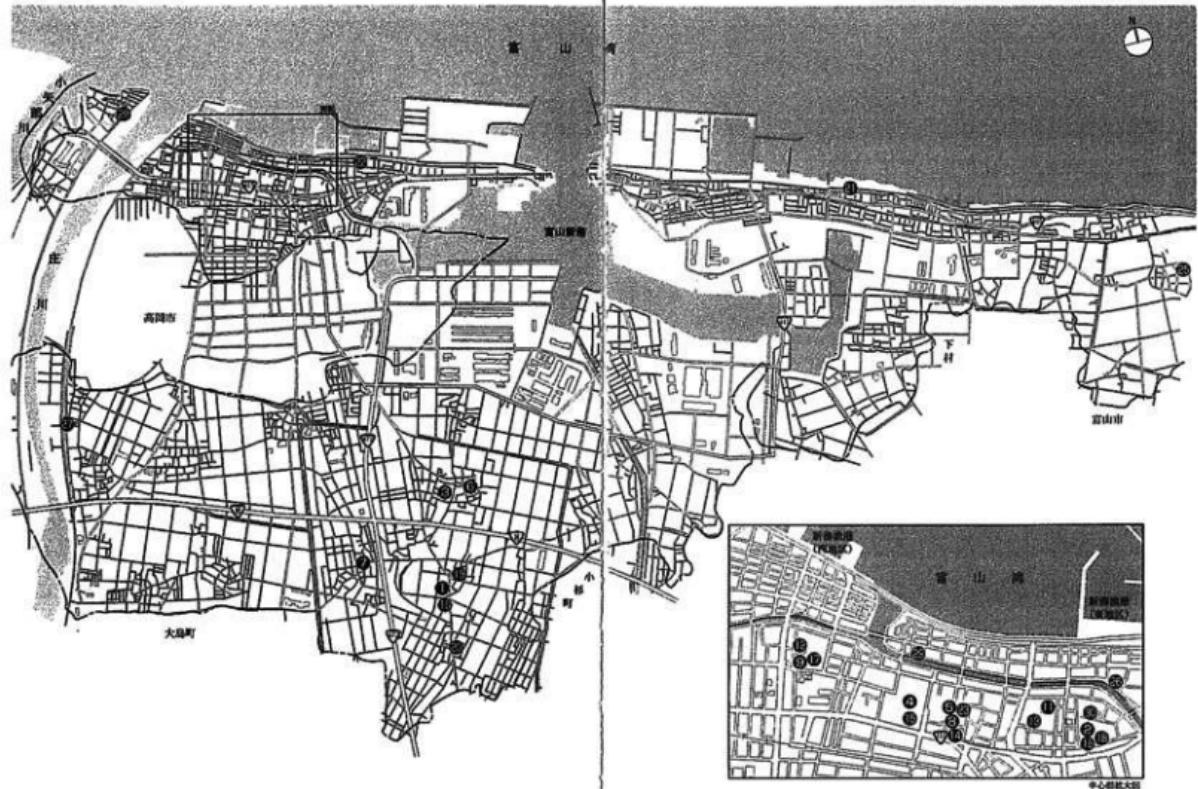
氣比住吉神社台輪鳥居



日吉社鳥居の額庇

所在地図

(地図中の番号は本文中の番号に対応する)



上野 幸夫 (うえの さちお)

(略歴) 1957年 宮城県生まれ

1976年 (財)文化財建造物保存技術協会に入会
後、全国の民家・社寺等の建造物の調査修復に従事

1985年 国宝瑞龍寺の修復事業や五箇山合掌造
集落の世界遺産登録のための調査

1991年～ 文化財建造物保存の国際協力(ODA)
としてネパールに渡り技術指導にあたる

1994年 高岡市民文化賞

1995年 北陸建築文化賞

1997年 富山国際職芸学院建築職芸科教授

富山県知事表彰

2001年 新湊市文化財審議会委員

(現在)

富山国際職芸学院建築職芸科教授

新湊市をはじめ県内各市町村の文化財
審議会委員を務める

建造物関係の調査・補修報告書をはじめ、寄稿文、執筆監修等多数

新湊の社寺建築

新湊市民文庫26

平成16年3月31日発行

編集・発行 新湊市教育委員会

新湊市本町二丁目10番30号

印刷所 株式会社二口印刷

新湊市民文庫の刊行に際して

海に開まれた島国で独自のすばらしい文化を育ててきた日本も、明治以降は世界の中の日本となり、激動の波に洗われながら幾多の曲折を経て、今や薫蒸、経済面では世界のリーダーとしての役割を担うまでにいたりました。しかしながらその反面で最も大切な人間の「ところ」の問題が薄れ、日常生活の支えとなる豊かな心の育成がおくれているのではないかと心配です。今こそ、私たちの「いのち」を育てている郷土の自然と歴史を見直し、多くの先達の努力と願いを知り、新湊の将来を考え、心の幸せを求めて学び接げる市民相互の協力によって、「あたたかい心の通つまち、新湊」の創生をめざして、一段の努力を積み重ねていかねばならないときだと思います。

順次刊行してまいりますこの市民文庫が、小冊子ながら、各位の生涯学習の糧となり、人間の生き方や郷土の将来を考える一つの機縁となるならば、これに過ぎない喜びはございません。

平成元年十一月

新湊市民文庫 (既刊)

- | | | | | | | | | |
|----------------------------|-------------------------|------------------------|----------------------------|---|-------------------|-------------|-------------------|----------------------------|
| 1 越北 | 中前木伏近神新と越 | 自由船の漁業令のと
とあるのと魚のとと | 進保明郎
英七
菊吉武迪
新義忠一 | 男弘美雄
十
三義雄
洋雄
雄巳
英雄誠浩 | 雄
已
雄
誠浩 | | | |
| 2 中木代仏新と越 | 前港漁離市やの中 | 動済み遷漁りち芸蕉丸る望鳥り | 高高古近荒北津久武放生新津の | 高
高
古
近
荒
北
津
久
武
放
生
新
津 | 渡木川内水脇沢木水 | 小竹清竹小荒清波篠小松 | 貞伸五
久昭菊五
正公 | 久
昭
菊
五
正
公 |
| 3 木分都ま海路の中 | 本分都ま海路の中 | 新ゆ変新ねた文芭王擺展観 | 久渡松小竹清竹小荒清波篠小松 | 下馬野 | ナミ子 | | | |
| 4 分都ま海路の中 | 分都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | 下馬野 | 真喜子 | 夫 | | | |
| 5 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | 上 | | | | | |
| 6 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | | | | | | |
| 7 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | | | | | | |
| 8 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | | | | | | |
| 9 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | | | | | | |
| 10 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | | | | | | |
| 11 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | | | | | | |
| 12 都ま海路の中 | 都ま海路の中 | 運變新ねた文芭王擺展観 | | | | | | |
| 13 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 14 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 15 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 16 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 17 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 18 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 19 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 20 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 21 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 22 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 23 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 24 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 25 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |
| 26 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | 新湊の奈興の生涯工陶放生持家新湊の新湊の人物伝 | の浦の移りと黒の記子 | 1 | | | | | |

